

性の低い畑を広く経営したが、手作業による農作業ではその面積にも限度があった。

### ③高度成長以降の農家経営の変貌

#### a 湖岸集落…農業・漁業の分離発展の傾向。

農業を中心とする場合は、耕地に恵まれている集落では集約的作物栽培（梨・蓮根）、耕地に恵まれていない集落では畜産（豚）を発展させ、湖岸集落の地域分化が顕著となる。漁業を中心とする場合は、獲る漁業から鯉の網いけす養殖へ転換している。

#### b 台地集落…近隣平地林地帯の開発が進み、交通も改善されたので、生産性の低い畑作農業には力を入れず雇用兼業への道を急速にたどった。農業は粗放経営のままで、従来の作物である甘藷・落花生を栽培する地域と、省力果樹である栗を導入・発展させた地域とに分化した。

## 高崎市の都市化と機能地域の分化

木 村 多美子

### (1)研究の目的

東京から100Km以内陸に位置する高崎市も、昭和40年前後から、急速な都市化が始まった。住宅は、旧市内から、続々と、周辺地区へ移転を始め、旧市内の小・中学校において、児童数が、年々減少する状況になった。このような、周辺地域への急速な人口流出と、それにとまなり都市的土地利用の拡大は、どのような要因で成されるものか、そして、都市の成長に伴ない、中心市街地の再開発が機能地域の分化をもたらすか、という二点を明らかにすることを、研究の目的とする。

### (2)研究の方法

明治時代以後の、都市的土地利用の拡大とその方向については、5万分の1の地形図を重ね合わせて調べ、その拡大の要因については、主として、高崎市の歴史に関する資料で検討した。また、昭和30年以降の、都市化の進展の著しい時期においては、農地転用の資料をもとに、分析を行なった。工場、卸売商の移転後の跡地利用については、資料をもとに、聞きとりと現地調査を行なった。

### (3)研究の結果

高崎市における、都市化の特徴を、戦前と戦後について分けてまとめた。戦前は、主として、鉄道開通による運輸流通機能の充実によって都市の発展がもたらされた。初めは生糸・絹織物の集散地として、卸売機能が、発展し、次に、食品・製糸の工場設置により、生産機能が加わった。それにとまなり、都市的土地利用の拡大は、高崎駅と、北高崎駅の二つの鉄道駅周辺に成された。戦後においては、特に、昭和30年代に、過密になった旧市内から、住宅、工場、商店、運輸施設の移転が始まった。その結果、都市的土地利用の拡大は、今までのように、北から東部へかけて、スプロールの拡がるだけでなく、飛地状に拡がった。住宅団地は、主要道路沿いの市外縁辺部に造成され、またそれらの地区へは建築業者による住宅建設も行われ、宅地化が促された。工業団地は、従来のように、駅周辺に立地し、八幡駅と倉賀野駅に、中心工場地区を形成した。それによって、二つの駅周辺の都市化が促された。また、問屋団地を、高崎市街地と国道17号線をつなぐ地点に造ったことにより、市

街地－問屋町－前橋をつなぐ道路沿線の都市化がもたらされた。これらの工場移転後において、北部工場地区においては、住宅、事務所への転用がなされ、市街地内においては、駐車場の確保につながった。問屋移転後においては、金融地区が形成された。また、駅前の運輸・流通施設の移転後は、スーパー、デパート等、大型店の進出となり、市街地内、7つのデパートの配置関係から、大手前通りと、中山道の交叉する地区に、中心商店街をもたらしした。しかし一部の金融地区、小売業地区を除いて、商業・業務地区は、未分化である。

## 富浦町における房州枇杷の農業地理学的研究

草 山 淳 子

### (1) 目 的

富浦町は、房州における枇杷の特産地である。論文では、富浦町で、枇杷栽培を可能にしている条件、制限している条件を探り、枇杷栽培が、農家の経営の中に占めている位置を把握し、地域区分をすることが目的である。

### (2) 枠 組

第1章では自然、人文の面から、地域の概観を述べた。第2章で、房州枇杷栽培がどのように行なわれているかを述べ、富浦町内での栽培地域の違いを論じた。第3章では、第2章で述べたことから、現状の問題点と将来の展望を抜き出して、考察した。第4章で、地域区分をし、要約を第5章とした。

### (3) 結 果

富浦町は、東京湾に面し、北部は丘陵地で、南西部に平坦地がある。夏期には、海水浴場としてにぎわい、海岸付近の漁家、農家では民宿経営が盛んである。農業では、温暖な気候を利用した花卉・栽培、枇杷栽培が行なわれている。

房州枇杷は、江戸時代に始まる出荷の歴史を持ち、斜面の多い地形を生かして栽培されている。枇杷のみの農家は見られず、民宿・花卉・花木・水稻・野菜・酪農のうちのいくつかの組合わせで行なわれている。海岸地域では、酪農を除いた他の5つと組み合わせれ、内陸地域では、民宿を除いた他の5つと組み合わせられている。それぞれの地域で、丘陵の部分で特に枇杷栽培が盛んで、花卉・花木との組み合わせ、平地の部分で、花卉・水稻・野菜との組み合わせが特徴的である。また、海岸地域は栽培の歴史が古いのに対し、内陸地域では新しく、枇杷園の拡大が進んでいる。

枇杷栽培にはいくつか問題がある。枇杷栽培に関しては、気候条件が秀れていないので、寒害を受けやすく、生産量が不安定であること、労力が収穫期に集中して必要なため、家族だけでできる面積が小さく、しかも雇用労力を得るのが困難なこと、老木化が進んでいるが、忌地現象のため、新改植が困難であり、ソテツへの転換も見られること等である。

枇杷は、農家では、複合経営のなかに組み込まれているが、これからは、花卉・花木の比重が高くなってゆくと思われる。栽培の歴史の古く老木化の進んだ旧産地で、その傾向が強いが、現在、栽培規模も大きく、枇杷が経営の中心になっている新産地でも、やがては、同じ問題に直面する時が来るのではないだろうか。